



受容の需要

10月4日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月4日のおはなし「受容の需要」

では始めましょうか。

かつてある劇団にひとりの役者がいたとしましょう。男でも女でも構わない。劇団を背負って立つ看板役者です。実力もあれば場数も踏んでいる。共演に誰が来てもだいたい合わせられる。相手を選ぶことなく、引き受けてみせる。個性的かということ確かに個性的でもあるが、むしろあまりクセはなく、相手との絡みの中でどんどん味が出てくるタイプとっていいでしょう。

実際その活躍は見事でした。とりわけ演技体の違う役者を客演に呼んだときなど出色と言って良かったでしょう。朗々たる節回しが特長の年輩の役者を招いた際は、その節回しそのものに新鮮に反応しました。演技体の問題としてではなく、その節回しを個人の身体のクセとして迎え入れることに成功したのです。舞台上を所狭しと駆けめぐり、せわしないアクロバットめいた身体表現が売りの劇団から客演がやって来た折りにはどうしたか。同様な身体表現を試みるがうまくいかない、そのうまくいかないもどかしさそのものをメインにすえて見せた。その客演俳優が得意とする身体表現を、言ってみれば「手話」のようなコミュニケーション方法と位置づけ、受け入れ、その熟練度の差として舞台に乗せる。そういったことを直感的にやってのけるのでした。

こうして劇団は、次々と変わる客演陣の強烈な個性の魅力と、どんな客演が来ても平然と飲み込んでみせる看板役者の懐の深さで、名声を築くことができたのです。

ある時、不思議な個性を持つ客演がやってきました。それはいままでとは違い、どこと言って演技体の差を語りにくい、でも明らかに世界の違う役者でした。その「違い」を個人の特異な性癖や、コミュニケーション手段の技術のように見せることは困難でした。なぜならその「違い」は、言ってみれば「住んでいる世界そのものの違い」とでも言うべきものだったからです。ここにいたって看板役者は追い込まれます。いままではどの公演でも、まず看板役者が対応する演技体を直感的に探り当て、他の劇団員はそれに従えばよかった。ところが今回ばかりは解決策が見つからない。どんなに稽古を重ねても客演の存在は浮き続けるばかり。要するに大いなる違和感として、世界を共有し得ないものとして、はみだし続けていたのです。

これまでならば、どこからどう見てもはみ出してしまう客演の存在を、いわば劇団の世界の中に上手にソフトランディングさせることができていた。ところが、今回ばかりは全く通用しない。上演の日程は迫り、解決策は見つからないまま。初めて看板役者に焦りが見え、そのことは劇団全体に動揺を与えます。演出家は何をしていたのかって？ もちろん慌てふためきます。看板役者にまかせきりでやってきて、実はそういうことに頭を使う機会がなかったからです。挙げ句にただ右往左往し試行錯誤を重ねては、かえって混乱を招くような指示をするのがオチ。客演の俳優は自分が受け入れられていないことを日々感じ取り、責任と苛立ちにバランスを失っていく。

看板役者。それは言うなれば白米です。主食と呼ばれ、わたしたちの文化の象徴のようにされつつも、その日その日わたしたちの関心を引きつけるのは、残念ながら白米ではありません。「今日はぶりの照り焼きが食べたい」「今日はコロッケが食べたい」「今日は麻婆豆腐が食べたい」という具合に、その日ごとに関心を引くのは白米ではなく、あくまでおかずです。ところでその、おかずの中に含めるべきかどうか悩ましい存在があります。それは白米同様に炭水化物を主体とする一群の食べ物です。不思議な個性の役者とは、つまり白米にとってのお好み焼きのような存在だったとっていいでしょう。

結果、この公演はどうなったか。悲惨な失敗を迎えたのでしょうか。いいえ、違います。最終的に客演を含め全てのスタッフとキャストを巻き込んだ悪あがきの果てにいつしか見つかったのは、「そういう文化なのだ」というものでした。世界の違うもの同士がぶつかり、その世界の違いそのものと取っ組み合いながら、一見共存しがたいところを平然と共存してしまう。「言うてもそこにあるんやから、しゃあないやないか」という文化。その異文化の併存を公演の裏テー

マのように染み渡らせることで、いわば見るも新鮮な文化圏の創造に成功したのです。それは客演の手柄でも看板役者の手柄でもなく、いわば共同体そのものの勝利でした。

そして、これこそ、わたしたちがお好み焼きをおかずに白米を食べる理由なのです。

(「お好み焼きをおかずに白米を食べる理由」 ordered by フィリピンパブ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

受容の需要

<http://p.booklog.jp/book/35038>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35038>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35038>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.